生死を分けた日―碧空の青春

宮本輝一　鹿沼市

●パイロットにあこがれて

昭和17年10月3日、15歳11か月で東村山にある東京陸軍航空学校（東航校）へ入校した。今市中学（現今市高校）在学中に試験を受けて合格したのだ。

当時は配属将校といって軍人が必ず学校にいて軍事教練を行っていた。今市中学には宇都宮中学と兼務の陸軍少佐の退役軍人がいたが、試験に受かった時には、その配属少佐から「よし、がんばってやって来い」などと励まされ、みんなが校歌と軍歌を送別に歌ってくれ、送り出された。

生まれは千葉の大滝町。父親が鉄道関係だったので転勤であちこち回り、高徳で定年になり大桑に移住した。父親がエンジニアだったせいか、自分も機械いじりが好きだったかもしれない。親戚の人がたまたま飛行学校の先生をしていて、休みの日にうちに来て泊まったことがあった。グライダーの模型などを作って飾ってあったのを見て、「パイロットになりたいのか」と聞かれたのがきっかけだった。

●大津教育隊で初めての軍隊生活

東航校に入校して少したったころ、滋賀県に東京陸軍航空学校大津教育隊が開校され、そこに移動した。入校して驚いたことは校舎周辺は胸に達するほどの雑草でおおわれていたこと。毎日、草刈と整地作業に明け暮れた。教科書はそろっておらず、ガリ版刷りのものでの授業であった。不寝番、メシアゲ当番などすべてが初めての経験で戸惑うことばかりだった。冬は横からたたきつける比叡おろしのなか、雪中乾布摩擦（タワシ）。恨めしかった起床ラッパ、ほっとした消灯ラッパ。三種混合接種時の練兵休、饗庭野演習場での水なし夜間行軍後の早朝、笹葉の水滴の甘露。三角兵舎の冷やっこいヤモリの落下、やぶ蚊の攻撃など、懐かしい思い出である。現在では練兵場が皇子山競技場に、山側の兵舎だったところは、警察学校になっている。

大津には1年間、17歳までいた。体力づくり、学科試験と徹底した訓練を受け、卒業前に適性検査を受けて、操縦、整備、通信、この三つの分科に分かれた。適性検査に合格した者は、宇都宮の清原の飛行学校に引率されてきた。それ以外の者は水戸（通信）、所沢（整備）の各校に入校した。パイロットは全体約２０００名のうち、四分の一未満だったろうか。

●清原飛行場で―赤トンボから

清原に10月に来て半年間、パイロットとしての気象学や工学、整備学などを勉強した。その間、50㌢くらいしか浮き上がらないが、ゴムのパチンコのような滑空機（グライダー）での訓練もあった。空中に上がったような気持ちになって嬉しかった。3月、赤トンボ（九五式中間練習機）は宇都宮に来て初めて乗った。３５０馬力が一つで二人乗り。自分の服はまだないので先生方の飛行服を借りて、前に乗れと言われ、鬼怒川沿いに飛行した。

その後乗った飛行機は、赤トンボから次に一式双発訓練機（双練）。８人乗りで４５０馬力が二つ。赤トンボよりずっと大きい。最後に乗ったのは百式司令部偵察機（百偵）だ。この司令部偵察機を改造した夜間戦闘機と、三式戦、四式戦、五式戦があって帝都防衛戦隊はこういう機種が活躍していた。

●下館の教育飛行隊―慣熟飛行訓練

その後分かれて、自分たちは真壁郡にあった下館の教育飛行隊に行く。移動するたびに勉強する内容が変わる。慣熟飛行は先生が前に乗って、操作が慣れるまで訓練する。単独飛行が可能なほどに技術が身についたと見当をつけられると、助教が区隊長（将校）に報告して訓練の仕上がりを確認することになる。

ちなみに下館飛行隊での宇都宮飛行学校長は、ノモンハン事件（注）の時の戦闘機乗りの隊長であった人物だった。ノモンハン事件でロシアの戦闘機と渡り合って被弾、火を噴きながら不時着した。戦車などがどんどん攻めてくる中、自分たちの先輩が単機着陸して、燃え盛る

機体から隊長を担ぎ出して、あの狭い戦闘機の自分の座席に足で挟むように隊長を抱え、弾がバンバン迫る中、ギリギリ離陸して救出したそうだ。校長殿は火傷で顔の皮膚がくっつき、ケロイドもひどかった。校長殿は精神訓話のとき必ず、「貴様らの先輩が敵中に着陸、不時着した私を救ってくれた。勇猛沈着、用意周到だったからだ。それを絶対忘れるな」と言った。校長殿はかつて捕獲したイギリスのバッファロウ戦闘機とアメリカのフェルチャイルドというセスナ機に似た青と白のツートンカラーのきれいな飛行機を持っていて、そのどちらかに乗って教育隊回りをされていた。

そろそろ単独飛行の認定だな、と思っていたある日、ちょうど校長殿が2式戦闘機で着陸。ピストに来られた。今度はI君の番だが、校長殿と乗るのだろうか、とひそひそ話していたら、区隊長が自分のところへ来て「宮本飛行兵、縛帯をすぐに付けろ」という。私はもう飛び終わっているので、「あれ?」と思ったが、とにかく「はい!」と答えた。「単独飛行の認定をするから、縛帯付けて校長殿に申告せい」と言われた。校長殿はもう赤トンボの前席でじっと待っておられる。自分はその下に行って「宮本飛行兵、ただいまから同乗飛行します」と申告したら「よし」と返答があった。教育隊長も縛帯とか全部チェックしてくれ、「いいか、普段の通りやれよ」と小さい声で耳打ちしてくれた。搭乗するのを待っていた校長殿が「必勝の信念をもってあたれば、何事もできる。大きく深呼吸をしなさい」と伝声管を通して言われた。「はい!」とでかい声で返事をした。もう、神様のような人なので緊張したが、無事に単独飛行の認定をもらうことができ、整備兵が翼張線中央に赤い吹き流しを付けた後出発、第2旋回後、軍歌「見よ東海の空あけて…」と大声で歌い単独飛行は終わった。

昭和19年の8月まで赤トンボによる訓練だ。その後分科の検定があり、戦闘機、爆撃機、偵察機は百式司令部偵察要員、軍偵要員と分かれた。

●岐阜県各務原飛行場―戦況が悪化していく

司令部の百式司令部偵察要員として、9月から11月まで岐阜の各務ヶ原飛行場の第10教育飛行隊に行った。その頃には戦況が緊迫していたから、外地部隊は早く一人前のパイロットをよこしてほしかった。つまり、パイロットを早く仕上げなければならない状況になっていたので、一区隊、二区隊に分かれて始まった教育が、1か月過ぎたころには、成績のいい者は高度な飛行訓練に入っている者もいて、同じ双練を練習していても、進度に差が出てきた。たまたま自分は進度の早い、二区隊に配属になった。ちなみに一区隊は鹿沼の銀座の大谷医院の息子さんが航空士官学校を出て区隊長をやっていた。非常に温厚なパイロットだったと記憶している。

自分たち二区隊は10月いっぱいで教育が終わり、百偵に移るというときだった。小牧飛行場の二式戦闘機部隊が、フィリピンの航空作戦に参加するため、荷物と人員の空輸ということが決まり、荷物が相当に乗る一式双発高等練習機が50機ぐらいと、教官も全員台湾経由でフィリピン輸送に出発された。つまり訓練するにも百偵を教えてくれる先生が不在。仕方なく一区隊は残った一式双練で、ある程度訓練をやったが、二区隊員は飛行場大隊という、飛行場の整備などを行う兵舎に移った。

●加古川―ときどき起こった事故

第六錬成飛行部隊がシナから転進が決まり、自分たちは三木に移ることになったが、三木という新設の飛行場に百偵が降りるには、地盤がまだ軟弱で転覆する恐れがあったので、整備が終わるまでの数か月は加古川で訓練していた。教育隊ではあるが実戦部隊でもある。訓練の合間を縫って索敵などをした。先生が後ろに乗って訓練を兼ねた実戦である。瀬戸内海から日本海に向けて偵察することなどがあった。老練の先生たちは、酸素マスクを付けて高度1万㍍くらいまで上がり、朝鮮、ソビエト近辺まで飛行していた。

あるとき、海軍の雷電という戦闘機が神戸空襲のB29との戦闘で被弾して、加古川に着陸しようとした。見ると、片方の車輪が出ていない。そのまま滑走路に降りたら火を噴いて一発で終わりなので、我々が飛び出していって、手を振って降りてはだめだ、と合図した。パイロットは何回も急降下、急上昇で車輪を出そうとしたがどうしても出ない。それで滑走路にあった布で芝のほうへ降りろと示し、何とか無事に降りられた。芝なら衝撃も少ないし、火災になる率が低くなる。無線もなく、ジェスチャーだけの伝達だった。

その雷電のトラブルがあったため、たまたま百偵の訓練をしていた同期2名と助教は着陸しようとしたのに降りられず、着陸復航して燃料切れで帰ってこない。不時着水、死亡された。

自分も指示されて、飛行機で姫路城や和歌山まで捜索に飛び立ったが、結局何も見つけられなかった。翌日、漁船から飛行機が沈んでいると連絡があった。助教は行方不明、同期は操縦桿を握ったままだったそうである。燃料切れになると速度を保持できず、失速して海面に激突することになる。

その探索のとき、初めて上から姫路城を見て驚いた。なんと、まっ黒である。また白く塗りなおすのは大変だな、と思った。終戦後聞いたところでは、あれは塗ったのではなくて、黒い寒冷紗のようなものを被せて敵に見つからないようにしていたのだとか。白鷺城と言われているのに、まっ黒だった。

●特攻として散った仲間たち

ある日、百式司令部偵察機（百偵）で訓練を終えて降りてきたら、飛行場の片隅に、赤トンボを迷彩したのが50機ぐらい並んでいた。そばにパイロットたちが何人もいたので、スイッチを切った後、近づいて行った。そうしたら向こうは、あんな最新鋭機に乗っているのだから私を先輩だと思ったのだろうか、立ち上がって敬礼した。こっちも敬礼を返したが、お互い顔を見たら若い。15期生だの、出身校だのを話しあった。「この中錬で50㌔爆弾付けて行くところだよ」「ここで燃料補給とお昼をごちそうになって、ちょっと休憩したら九州まで行く」とのことだ。特攻隊の基地があった鹿児島の知覧に行く途中だったのだ。彼らはほんの初歩の練習機に爆弾50㌔を積んでいた。同じ同期生でこっちは最新鋭飛行機で降りてきたわけだ。「いいのに乗ってるなあ」と羨ましがられ、「おれはこれで行くからな」と言うので、「俺もあとから行くから」と返した。

●三木での楽しみ

飛行場整備が終わって加古川から三木に戻り、そこで訓練が始まった。

離陸してすぐのところに女子修道院があった。年頃のこと、離陸すると体を傾けてそこを見ていく。朝、グレーの法衣を着た人は畑を耕したり、白い服の人は監督のように見回ったり。毎日それを見るのが楽しみで、手を振ったりしたが、向こうは応えちゃくれない。終戦後、部隊の会合があって、その話題を切り出すと、「なんだ、お前もか、俺もそうだよ」、「いやあ、あれ見るの楽しみだったんだよ」と盛り上がったこと。修道院は北海道に移転して、そこにはもうないとか。あの人たち、どうしてるだろう、元気なら、おばあさんになっているだろうな、と思うことがある。

●帝都防空命令―特攻として

三木も練成飛行隊実戦部隊を兼ねているので、百偵にも爆装し（爆弾を装備すること）、いつでも出撃できるよう準備を始めるのだ、という話が耳に入った。百偵というのは、沖縄まで特攻隊機の誘導をしたり、それから戦果確認といって上空で、アメリカの空母撃沈とか、そういうのを確認して帰着するのが任務である。しかし、それが特攻として行かなくてはならないような戦況になってきたということだ。

爆弾は1機で８００㌔、爆撃機と同じだけ下げる。これはいよいよだなあ、だれが一番先に行くのかなあ、などと噂していると、集合がかかり、「第二区隊員11名に大命下りたり。名を呼ばれたものは一歩前進、調布独司第17中隊へ

の出発は明け4日、私物整理出発準備せよ」と。自分も呼ばれた。「帝都防空、第17飛行戦隊付き、を命ずる」戦隊に転属でなくて、「戦隊付き」ということは、その17中隊でまた、何かあるなということは感じた。

帝都とは、東京のこと。帝都防空戦として調布から防空戦闘機が出ていたが、ついに来たかと思いながら部屋に戻った。平常心であった。4日は部隊長ほか幹部と乾杯、激励、握手、レンゲ咲くのどかな日、在隊者に送られ東京へ向かった。

第17飛行中隊の百式司令部偵察機は、B29に対応する飛行機として改造された。機関砲2門、天井に一つと前方に二つ。B29の下にもぐって戦うということである。単発の戦闘機では無理で、高空で対応できる機種は少なかった。

三木から、電車で神戸に行き、神戸から汽車で東京を経由して調布まで行った。東京では、市ヶ谷の大本営の航空本部に出頭してそこで集団長に申告。そのとき初めて「特攻」だということがわかった。大本営の2階で、「よし、頼む」それだけ言われた。

次に調布で第十七飛行中隊長に申告。全員が並んで牧野侍従長を通じて下賜された、飛行服につける明治天皇の天皇の御衣の日の丸をもって、謹んで記念撮影し、飛行服両腕に縫い付けた。

●特攻の準備

空爆で屋根が鉄骨だけになった東武浅草駅。その間から青空がのぞき、太陽もさしていた5月、電車で館林に向かう。館林の第三十戦闘飛行集団では、超低空訓練と東京湾への艦船攻撃訓練が毎日続いた。館林では司令部偵察機が4個隊24機、四式戦闘機という特攻隊が72機、軍偵という足が出たままの4区隊。パイロットや飛行機が集結して訓練に励んでいた。

沖縄が陥落して、敵は九州から本土上陸を目指しているという情報はもうキャッチしていて、「決と号作戦」（決戦の特攻作戦）に自分らは従事していた。いちばん早く梶川隊が千葉県の八街飛行場に6機、8月5日に転進した。われわれ272振武隊には「8月14日に鈴鹿の前進基地に転進して、そこで800㌔爆弾を爆装して北上し、機動部隊に突撃する」という内命が来た。

私物を整理して遺書も書いた。報道班員に写真を撮られたり、そういう準備を全部終えた。隊長に許可をもらい、整備兵に手伝ってもらって機体に「宮本」と書いた。出撃したあと、整理した私物を自宅に届けるよう手配し終わったとき、通信室から「どうも戦争は終わったような感じですよ」という噂を聞いた。

●危機一髪―生死を分けた日

隊長から「15日に重大放送があるから14日の出発は延期にして、その放送を聞いてから転進せよ」という命令である。

そして、敗戦の玉音放送。一瞬全身の血が止まったのか、逆流しているのか、わからない。隊長から「貴様たちも帰郷してまた頑張ってくれ」と言われたときには、「生」と「死」が瞬時に逆転した。自分は国のために行く、明日出撃するつもりでいたのに……はて、これから、どうしたらいいんだ。驚きと戸惑い、頭は真っ白、虚脱状態。何とも表現のできない心境だった。

なすすべもなく過ごすわれわれに17日、最後の飛行許可がでた。後部席同乗の機付長だったと思うが、最後だから600㌔を出すと言う。高度約3000、機首を抑えレバーを前方へ。エンジンすこぶる快調、速度400～500㌔で主翼沈頭鋲のまわりが、さざ波のように揺れる。もう少し頑張れと念じつつ、計器速度は600㌔を突破する。レバーを絞りナセル付近を眺めて巡航速度に戻り、再び味わうことのない北関東の碧空の青春を満喫して…すべてが終わった。

●その後

家に帰ってきたのは9月末。その後、警察保

安隊がすぐでき、パイロットの募集をしているので、同期から行かないかと誘われた。親に相談したら、頭から怒られた。遺書まで書いて心配かけておいて、またパイロットで保安隊に行くなんて、もってのほかだと。結局パイロット関係からは足を洗ったが、後で聞くと、ＪＡＬやＡＮＡの国際線の機長になった仲間もいた。

陸軍少年飛行兵となり、最新鋭司令部偵察機を操縦するまでの千有余日の月日は、今思えばすべて懐かしいばかりであるが、当時の少年パイロットの振り回された生と死の人生でもあった。

当時の飛行時計、大津校日誌、操縦徽章、伍長階級章は手元で保管しているが、他の軍服、縛帯、教科書、マフラー、血染めの日の丸鉢巻等を陸自宇都宮航空学校に寄贈したので、現在、航空資料館に展示されている。

飛行時計
（昭和19年服部時計店製）
機体のコックピットについていたものを外した。ぜんまいで70年近くたった今でもちゃんと時を刻んでいる

操縦徽章と弾丸
一人前になるとこの服そして上等兵になる徽章を先生から軍服につけてもらえる。

注：ノモンハン事件
一九三九年（昭和14年）5月から9月にかけて、満州国とモンゴル人民共和国の間の国境線をめぐって発生した紛争のこと。一九三〇年代に大日本帝国とソビエト連邦間で断続的に発生した日ソ国境紛争（満蒙国境紛争）のひとつ。満州国軍とモンゴル人民共和国軍の衝突に端を発し、両国の後ろ盾となった大日本帝国陸軍とソビエト労農赤軍が戦闘を展開し、一連の日ソ国境紛争のなかでも最大規模の軍事衝突となった。（ウイキペディアより）